

廣瀬淡窓と咸宜園

原 千里

はじめに

廣瀬淡窓は、天明二（一七八二）年廣瀬宗家五世三郎右衛門（号桃秋）の長男として日田の地で生まれた。当時の日田は天領（幕府直轄地）で、文政四（一八二二）年に西国筋郡代が配置された。西国筋郡代（約一七万石）は、九州諸大名の動静を監察。日田は、九州の政治の中心地で、山間の僻地ながら、交通、経済、文化の要地。日田には、他とは「違った風」が吹いていた。淡窓は、そんな日田で生まれ福岡の亀井塾で学んだ二年弱を除いて、生涯を郷里で過ごした。

淡窓は、一六歳で亀井塾に入門した。だが、病弱故に一八歳で退塾。日田に帰り、その後師につくこともなく、七五歳で他界するまで独学を続けた。その間に多くの著書を残した。その遺著は、多方面にわたり、三〇種類、一〇〇冊を超えている。代表作に『懐旧楼筆記』『遠思楼詩鈔』『約言』『析玄』『義府』『迂言』などがある。

闘いでもあった。

南冥は、淡窓に送別の詩を贈った。寛政一一（一七九九）年のことであった。

現代語訳

「山の様子も余寒で色がさえないところを行く旅人は、身が軽く鳥が飛ぶようで、ちようどつれない鴻が飛ぶようである。苞樓の柳によじ登り朝雨にいとまごいをして、菅公の社では梅をたずねて夕もやの中にお詣りした。仕官をするための学問は完成してすでに南郡の帳面に出し尽くした。帰って父母の安否をたづねたとしても、どうして母上は織っている機をたち切るような事をしようか。湖南の門人よ、ぜひとも記憶しておいてくれよ。この世では、よいめぐり合わせというものは、長続きしないのである。」

2 その講学

(1) 長福寺学寮での開塾

淡窓は、一時医者になることを真剣に考えていたが、これも病弱故に断念。そして、命の恩人である肥後の医師倉重湊の叱責と激励を受け講学で身を立てる決心をした。家業（博多屋）を弟久兵衛に継がせた。自らは長福寺の学寮を借り、寝食を共にして二名の塾生に教えたのが講学の始まりである。淡窓二四歳の文化二（一八〇五）年のこと

1 その修学

二歳の頃から、西国屈指の俳諧師である伯父秋風庵月化に預けられ薫育された。六歳で伯父月化を離れ父母のもとへ戻った。七歳から父桃秋より『孝経』の句読（素読）を受け、八歳で『四書』も終了。その後、日田長福寺の法幢上人に『詩経』の句読を授かった。さらに、その間に父桃秋より『古文真宝』を教わった。

九歳で豆田室町の頓宮四極に『蒙求』『漢書』『文選』の講義を受けた。

一〇歳で、久留米の浪人で学問に造詣の深い松下西洋に漢詩を学ぶ。一一歳で、日田にやって来た肥後光徳寺の法海上人に五律（五言八句）を学んだ。

一二歳にして、一日百編作詩。その頃日田に來遊して、桃秋と親交があつた高山彦九郎がこのことを知って絶讃した。

一三歳で、日田の羽倉代官に『孝経』を講義。十四歳で、当時佐伯にいた松下西洋に四か月間教えを受けた。短期間ではあるが、初めての外遊。

一六歳で、福岡の亀井塾に入門。南冥、昭陽父子に詩と文を学んだ。ようやく学問の方向が定まろうとしていた矢先だったが、一八歳にして退塾。前述の通りである。この時淡窓は、残された日記などから、胸部疾患と急性胃力タールを患っていたものと推察される。淡窓の生涯は、病との

であった。

身を立てる術を確立した淡窓は、七言絶句四首を賦して、その感慨を次のように述べている。

古寺寓蹤甘寂寥 古寺に蹤を寓せて寂寥に甘んず

二三鄰曲自相要 二三の鄰曲自ら要む

春來秋去多詩料 春來り秋去り詩料多し

家近城南花月橋 家は近し城南花月橋

現代語訳

「古い寺に住み、ひっそりとして寂しいが満足している。二三軒あるお隣さんとも親しくなり、自然とお互いに求め合うようになった。今住んでいる家は城の南の花月橋に近く、季節の移り変わりには、詩の材料になるものが多い」

(2) 成章舎時代

同年八月、寺の都合で他の場所へ移ることになった。日田・豆田町の大坂屋の部屋を借りて、そこを「成章舎」と名づけた。「成章舎」には①学問を明らかにする②塾生一人ひとりがりっぱになるの意味がある。

この時、最初の「月旦評」が創られた。それは、最下級が四級。そして最上級が一級。四級からなるシンプルなものであった。最初の「月旦評」には、一五名の塾生の名前が見られる。

(3) 桂林園時代

淡窓二六歳の文化四（一八〇七）年、「桂林園」を建設。

「桂林」は香りの強い樹木。「桂林」の名は、中国の晋の郤詵（せきしん）が高等官の試験にトップで合格した時、「桂林の一枝を折つたにすぎない」とへりくだったという故事に由来している。「塾生たちにそうした「謙虚な心」を持つてもらいたい」との淡窓の願いが込められている。

この頃、淡窓は「入門簿」を作成。「住所」「氏名」「年齢」などを書かせた。これは、今日の学校教育における「学籍簿」である。

淡窓は、二九歳で豆田の合原善兵衛の娘ナナ（二〇歳）と結婚。塾生は三一名となり、通塾生も含めると六〇名に達していた。

この桂林園は、一一年間続き咸宜園へと発展していった。

(4) 咸宜園時代

淡窓三六歳の文化一四（一八一七）年二月二八日に、堀田村の秋風庵の隣地に桂林園を移築。同年三月二五日、「咸宜園」と改称した。

淡窓に始まって甥の林外（りんがい）が四代目塾主を退くまでを、「咸宜園前期」と呼ぶことにする。淡窓、旭荘（あしたむら）（淡窓の末弟）、青郷（せいこう）（淡窓の高弟・旧姓矢野）、林外（旭荘の長男）が咸宜園主を務めた時代である。

淡窓七一歳の嘉永五（一八五二）年、咸宜園は塾生が二三名に達してその最隆盛期を迎えた。

明治四（一八七一）年から明治三〇（一八九七）年まで

『広瀬淡窓の研究』（ベリかん社）の著者である田中加代氏は同書で次のように述べている。

「咸宜園の『咸宜』の由来が『詩経』の商頌玄鳥篇中の『殷命を受くること咸く宜し、百禄是れ何う』であることは多くの研究者が指摘するとおりであるが、その意味が『士農工商僧医等各方面の人に適応した開放無差別の不偏不党的学園を意味し、また学問の機会均等、教育の民主化を表明したものであろう』とされ、どんな身分の人をも受け入れることを意味したものであると皆一様に言うのは、単なる後世的な解釈であると思われる。『詩経』のその部分の意味は、決して四民平等ということを謳った箇所ではなく、『殷が天の命を受けて天下の王となることはことごとく宜しく、多くの福を何って、湯王から中宗・高宗を経て、その子孫である今の世に及んでいる』ということを言っているのである」

また同氏は同書で「淡窓が『詩経』の中の『咸宜』の右のような意味を理解していないはずはなく、またそれを理解しながら本来の意味を全く無視して、『万人平等』という自己流の解釈を施したとは考えにくい。なぜならば、当時の儒学者としては、経義に基づくことが基本的なあり方であったからである。

つまり、その理想の政治が行われた世にあやかかって淡窓が塾の名を定めたということは、塾の中にそうした理想の

を「咸宜園後期」と呼ぶことにする。約二六年間で六名の塾主が入れかわった。「明治の学制」制定以降、塾生は激減。大方の塾は時代の使命を終え閉塾。藩校は、中学校として再出発した。

咸宜園も他の私塾同様衰退の一途。財政的理由から休塾した時期もあった。一時、中学校に移行。だが、長くは続かない。明治三〇年、時代の使命を終えて咸宜園は閉塾。社会は「塾の時代」から「学校の時代」へと大きく舵を切った。社会の大きな変化に抗しきれなくなったのである。

咸宜園の教育は、他の私塾とはかなり違っていた。その教育は組織的であり系統的であった。その教育理念や手法は、淡窓の高弟長三洲（明治政府学制取調掛、その後文部省学務局長）を通して「明治の学制」に採り入れられた。さらに、明治以降の我が国の学校教育に大きな影響を与えた。

3 「咸宜」とは？

「咸宜」とは、中国最古の詩集『詩経』にある「殷、命を受くること咸く宜し、百禄是れ何う」に由来した言葉である。今日的解釈では、「来る者は拒まず。万人に塾の門戸を開放」とか、「『咸く宜し』とは全てのことによるらしいという意味で、淡窓は門下生一人ひとりの意志や個性を尊重する教育理念を塾名に込めた」とされているが、

世を実現することが目的であった」と述べている。

4 注目すべき咸宜園の教育

咸宜園では、入門者全員が「年齢」「学歴」「身分」を無視して級外（無級）に置かれた。「三奪法」である。

「我が門二入ル者、三奪ノ法アリ。一二曰ク、其ノ父ノ付クル所ノ年齒ヲ奪フテ、之ヲ少者ノ下ニ置キ、入門ノ先後ヲ以テ長幼トナス。二二曰ク、其ノ師ノ与ウル所ノ才学ヲ奪イ、不肖者ト伍ヲ同ジクシ、課程ノ多少ヲ以テ優劣トナス。（三三曰ク）、其ノ君ノ授クル所ノ階級ヲ奪イ、之ヲ卑賤ノ中に混ジ、月旦ノ高下ヲ以テ尊卑トナス。是レ三奪ノ法ナリ」（『燈下記聞』二巻）

無級から実力（試業・課業など）で昇級させた。それは厳格なものであった。仮に試業（試験）などで合格点に達しても、仮進級で「権」の字が付された。独見（面接試験）に合格して、はじめて本進級となった。それは「消権」と言われた。さらに、特に実力のある者には「真」の字が付された。「真権法」である。こうした手法は「真の学力」や「それにふさわしい人格」を見るのが目的であったと考えられる。

月旦評は、厳格なもので私情の入る余地など全くなかった。だが、他の私塾でかなりの学力を付けているなどの理由で、無級に入れたのでは、学級遍成上極めて不都合との

理由から「飛び級」させた例がある。また、問題を起こした塾生を降級させた例などがないわけではなかった。しかしながら、それらの例は例外中の例外で極めて少なかった。飛び級を意味する「超遷」という言葉は、天保一〇年の月旦評に登場する。

毎月試業が実施され、その成績を発表。最下級が無級で一級から九級で成っていた。また、各級が上下に分かれ、一〇級一九段階。この成績序列表が「月旦評」である。平等主義に裏打ちされた実力主義が貫かれていた。

「月旦」は、中国の『後漢書』の「許劭伝」に見られる言葉で、「人物評」の意味である。咸宜園では学業成績評そのものである。

三奪法については、ことさら説明の必要はなからうが、古くは中国で、禅門の修行僧は入門時に「年齢」「学歴」「身分」、即ち俗界における決定的な差別の根拠を奪われた。それは、仏法の下では全ての求道者が平等であるということを知らせるために実施されたと言われている。

咸宜園で、淡窓がこの三奪法を採り入れたことは、封建身分制度への挑戦、だつたとも考えられる。人々の間で新しい社会制度を希求する動きが顕著となる幕末期にあつて、淡窓の咸宜園は恐るべきエネルギーをはらんでいた。

「職任制」は、今日の学校教育でいう全員参加の学級・学校経営制度である。「学校は単なる知識教育の場ではな

く、現実社会のモデルである」とする米国の教育学者ジョン・デューイ（一八五九—一九五二）の教育哲学にもつながる制度である。

塾内役割分担（職任制）には、生活面だけでなく、学習面でも様々な役割分担があつた。塾生たちは全員、能力や個性に応じて役割を分担した。師に代わって講義する「都講」、それを補佐する「副監」をはじめ様々な役割があつた。輪読・輪講および会読生の弁論を監視する「会頭」、履き物の整理をする「履監」など二〇を超える役割があつた。塾生の数が増加するにつれて、その数が増していったことは言うまでもない。

塾の運営や維持に必要な大半の仕事は、塾生によつてなされた。また、全ての塾生の参加が期待されてもいた。こうした制度を淡窓が設けた目的は個性尊重の教育。そして、「指導力」や「組織力」を身につけた指導者を育成することであつたと考えられる。無論、役割を通して実際の知識を獲得させる狙いがあつた。「実学」の精神も読み取れる。

この職任制一つ見ても、咸宜園での教育が知識偏重ではなかつたことがよく分かる。「月旦評」と「職任制」は、淡窓・咸宜園教育の「車の両輪」と言つても過言ではない。塾生たちの希望がどの程度職任制でとり入れられたかは分からない。今日の学校のように選挙ではなかつたことは、

明らか。淡窓が任命したことは間違いないところである。淡窓は、一応の目安として「月旦評の高低」を考慮した。そのことは、「是日作分職差等。塾長。副監。諸塾監。諸会頭。主簿。書記。諸職準之六級五級四級。侍者直日。準之三級二級一級。掃人準之無級。其詳掲諸東塾。故不録。」（文政一一年一〇月一四日条、『欽斎日曆』巻二）の記事に読み取ることができる。

しかしながら、全ての役割分担が学業成績のみでなされたのではない。例えば、主簿（会計係）、経営監（諸塾の破損を見廻り、師家へ連絡する係）、新来監（新入塾生の指導係）などがそうであつた。その「人間性」も加味された。淡窓は、塾生の分担された職の勤務態度や学習態度なども参考にした。その資質や人間性が問われる役割では、夜会、放學、山行などの諸行事をはじめあらゆる機会に塾生を観察して、適任者を見つけ、「適材適所」の精神で任命したと考えられる。

5 咸宜園で学んだ人たち

淡窓の咸宜園では、実に様々な人たちが学んだ。入門簿に記載されている入門者の数は四、六一七人。そのうち淡窓時代五〇年間では、三、八一一人。この数字には、淡窓の末弟旭荘が大坂で主催していた「大坂咸宜園」の入門者も含まれている。実際は、淡窓時代の日田咸宜園への入門

者は二、九一五人。青邨（第三代咸宜園主）時代、三九〇人。林外（第四代咸宜園主）時代、八〇七人。咸宜園前期計四、〇一二人。これらの入門者は、全国六八か国のうち六六か国から来ていた。入門者は、武士六・四パーセント。僧侶三三・八パーセント。その他五九・八パーセント。正確に区分することは、困難であるが。

入門時の年齢は、一四、一五歳から二〇、二一歳までが最も多かつた。

咸宜園で学んだ人たちは、後日、教育分野だけでなく様々な分野でリーダーとして活躍。高野長英（蘭医）、大村益次郎（軍政治家、兵部大輔）、松田道之（東京府知事）、長三洲（文部省学務局長）、横田国臣（大審院長）、朝吹英二（明治実業界の重鎮、王子製紙会長）、清浦奎吾（内閣総理大臣）、秋月新太郎（東京女子高等師範学校校長）など、咸宜園で学び、その後の日本を支えた俊英たちは枚挙にいとまがない。

衆議院議員、貴族院議員、そして知事など大きな権力を持つ政治家もいた。中村元雄（貴族院議員、内務次官）、廣瀬濠田（第八代咸宜園主、衆議院議員、日田町長）など、確認されているだけでも一〇名を超えている。これらの人たちが、明治以降の我が国の教育にも大きな影響を与えたと考えられる。

明治の学制制定で『学制五篇』を起草して大きな働きを

した長三洲や、前述の秋月新太郎などは今日に至る我が国の教育の大きな流れをつくった人たちと言える。

咸宜園で学び郷里に帰り、そこで私塾を開いた人たちにさらに、学制制定後、小中学校の教師を務めた人たちもいた。地味だがその与えた影響は決して小さくない。

新聞を刊行した人たちもいる。福岡日々新聞（現西日本新聞）創刊に尽力した自由民権論者・県議会議員倉富恒次郎が、その一例である。これまた教育だけでなく、人々の生活全般に大きな影響を与えたことが推察される。

咸宜園で学んだ人たちの中には、姓や名前が在塾中と異なる人たちもいて、確認がなかなか難しい。だが、勤皇家、政治家、官僚、教育者、医師、軍人、僧侶、神官など様々、各界で活躍し、近代化を急ぐ日本の大きな推進力となった。

おわりに

最近、学校教育が何かおかしい。「いじめ」など学校現場における諸々の問題がマスコミをにぎわしている。「学校現場が良くなっている」との実感は全くない。むしろ

「ますます深刻化している」の思いを禁じえない。

咸宜園は、「教育の場」というよりも「学びの場」であった。入学試験もなければ、修業年限もなかった。塾生は師から学びとるべきものを身につければさつさと塾を去っていた。

地方自治体の首長に大きな権限を与える「教育委員会改革」をはじめ様々な「教育改革」が法制化されてきた。だが、そうした改革で、学校教育がどの程度良くなるのかははなはだ疑問である。今日の「学校教育」を「教育の場」ではなく「学びの場」という視点から見直してみる必要がある。近代学校教育を予示・準備した淡窓の咸宜園今、その原点に立ち戻ってみると案外今後の展望が開けてくるかもしれない。

引用・参考文献

- 日田郡教育会『淡窓全集』（増補三卷思文閣）
- R・ルビンジャー『私塾』（サイマル出版会）
- 廣瀬正雄『廣瀬淡窓手ほどき』（廣瀬資料館）
- 海原徹『廣瀬淡窓と咸宜園』（ミネルヴァ書房）
- 井上義巳『廣瀬淡窓』（吉川弘文館）
- 深町浩一郎『廣瀬淡窓』（西日本新聞社）
- 原千里『廣瀬淡窓と明治の教育理念』（西日本新聞社）
- 田中加代『廣瀬淡窓の研究』（ペリかん社）
- 井上源吾『廣瀬淡窓日記』（葦書房）
- 井上源吾『若き日の廣瀬淡窓』（葦書房）
- 工藤豊彦『廣瀬淡窓・廣瀬旭荘』（明徳出版社）